

巴里のモデル

黒田清輝氏談

さう／＼巴里のモデルの話をしてことでしたね、巴里のモデルの事を云ふと、直ぐ思ひ出すのは、サラ・ブルーンです、それは薄黄色の髪で、眼玉の青い、肌は白に淡紅の血色を帯びた、まあ牛乳色で、ポウツと金色の粉を撒つた様な感じがあつた。丈は高くなく、凡五尺二三寸位、西洋の女としては小造りの方で、歳は二十七八、肉は少し付き過ぎて、稍肥りぎみで、従つて形の方は優美といふ程ではなかつた。私は六七年の間を通じて、随分多數にモデルを見たが、巴里のモデルとして代表的な感を起すのは此女である。

サラ・ブルーンは私共に對しては極めておとなしかつた。何故ならば、私共をば小供あつかひにして相手にせぬのである。元來モデルなるものは、こちらで云へば、人足やなにかの様に、つまり人に雇はれるものなんだから、職業としては固より上等なものではないが、常に老大家などを相手にして居るモデルは、自分がモデルになつた繪のことを話すのに、「何々の繪は私がかいた」と言つて居る、畫家と一緒に居るモデルは、自分がモデルになつた繪の事を云ふやうなモデルになると、畫家の方でも友達の様にして交際する。サラ・ブルーンなどが、我々書生の處へ來てモデルになつたのは、まあ墮落と謂ふべきであつた。恰も立派に出世して居たものゝ零落したのを見るが如き有様で、我々は一種の敬意に加ふるに幾分か哀憐の感もなかつたではない、併しサラは其頃でも元氣は中々盛であつた。我々の處で此モデルを使つて居る頃の事だつたと思ふ、キャッツ・ザールと云ふ美術家の團體が出來て、盛ん

な騒ぎをした時、此女は眞裸で臺の上に立つて、畫家彫刻家にかつがれて、市中を巡り歩いて、警察に捕まつた、後で書生連があやまりに行つて貰つて歸つたと云ふ様なこともあつた。斯んな無邪氣な亂暴は、今から十六七年前の彼の地の社會の状態ではをかしくはないことで、一種の元氣で、人も怪しまなかつた。美術家の騒ぐのは前々からの風習で、古く昔へ遡れば遡るほど、餘計に騒いだものだ。我々の巴里に居た時分は、前時代に比べては餘程をとなくなくなつて居たので、今日は益々をとなくなくなつた。風習が漸々變つて來た。當時の事を回想すると、毎時でも私の頭にサラ・ブルーンの事が浮んで來る。

我々が其學校時代を過ぎて二三年經てから、其女が或畫家と共に田舎の方へ來て居たことがあつた。至つてをとなくして世間慣れた女で、容貌も一寸綺麗で、其れに不斷美術家を相手にして居る丈に、他の氣に入る様な風をして居る、頭の髪を眞中から分けて希臘羅馬の風を折衷した様な風をしたり、淡白な風をして居た。

巴里とモデルとをくつつけて回想すると、まあこう云ふ風だが、モデルが皆悉くそうではない。種々さつたのが居た。普通書生の集まる、云はゞ研究所と云ふ様な處に根據を有つてるモデルは、此頃は知らぬが、私の居た時分（一八八四、五年より一八九二、三年頃）は、伊太利の人が多かつた、女も男も、老夫でも老婆でも何でも居た。それ等が皆純粹な伊太利風をして居た。男の風は格別目立たぬが、多くは縞のよごれたカナキンかフランネルのシャツを着て、カラなどをはめて居るのはなかつた。女は白シャツを胸から上はむき出しにして、コルセットの様なもの、胴を締めて、頭にはハンケチ風のハデナ色の縞の布片で髪を巻いて、結び目を後に垂れてゐた。シャツは肩の邊から腕へかけて廣く手頸の處がすばまつて居た。街で此群に出逢ふと直ぐモデルと分つた。書生の爲に雇れるモ

デルは大抵これ等の伊太利人である、其伊太利人のモデルと云ふのは親子代々モデルで又至て貧しい暮しをして居るので、頗る軽く視られて居た。併し大家でも圖取の都合で、それ等のモデルを使ふこともある。私が二度目（一九〇〇年）に巴里に往つた頃にはそれ等の伊太利風のモデルがまるで見えなかつた。伊太利人のモデルでも佛蘭西風の服装に變つて了つて居た。それは私が先に歸つて二三年経つて後、伊太利労働者排斥が盛んで、街で石など擲げ付けられるので、皆服装を變へて了つたのである。それだから、佛蘭西人と差別がなくなつて、伊太利人かと聞いて始めて知ると云ふ様なものになつた。肉付きの上から云ふと、伊太利人と佛蘭西人とは異がう、特更にちがうところは、伊太利のモデルは大體肉に丸味がある、それが爲めに、餘程注意しないと繪に丸みがつきすぎて卑しくなる。佛蘭西人のモデルにはそう云ふ事は少ない。イキナ側からでは佛蘭西のモデルを擇ぶ方が宜い様である。

モデルの種類では、矢張り何にでもある通り、上中下があつて、上等のモデルは書生の雇に應じない、大家が雇ひ切つて居るから暇がない。中等に位するものは、上等の衰落したものか、また上等と稱するまでにならない出たてのものである。下等のモデルは澤山居る、マア書生の替古描きは下等に屬するのを使ふのである。

サラ・ブルーンの如きモデルが、偶まに替古場にやつて來ると、書生などは頭があがらぬ。そう云ふ老練なものになると、頭からやられるから、書生の方では一向氣焰があがらぬ。成るべく氣にさからはぬ様にして姿を寫すと云ふ風である。

巴里の美術學校には、學校の雇と云ふ名前を貰つて居て、學校で使はれぬ時に、世間で仕事をするモデルがある。

学校の男モデルの中には、昔の希臘人の肉付にそっくりなものも、またゴール人の體格に似たものも居た。

モデルには自分の風丰體格の特色に依て、それぞれ相當に姿を拵らへて、或専門になつて居るのがある。譬へば耶蘇専門のモデルは髪を長くし、髻を二つに分けて耶蘇らしい姿をして賣込み。「バツキユス」専門のモデルは、でぶくした腹をして、徳利と盃を持つてやつて來る。

モデルの數は大へんなもので、畫家には此上もなく重寶である、色の釣合上、種々なる髪の色、或は肥、或は瘠、お好み次第なのがある。

巴里に居を占めて居れば、桂庵婆みた様なものに頼まなくても、彼等は自身で始終方々の畫室を巡つて用を聞いて歩くから、それを見て置いて、用のある時はハガキでも出せば直ぐに來る。私等の様に無名のものゝ處にでも、一週平均三四人も來る、男も女も小供を連れたのも來る。特に月曜から火曜に掛けて多く來る。忙しい時に、用がないと斷ると、體だけ見て置いて呉れと云ふ、體を見るのもうるさい程なので、番地だけ聞て返す、斯う云ふ譯だから自由である。

賃銀は人によつて多少差がある。又夏などで用のない時にはいくらかはまけるそうだが、普通は女が半日五フラン男は四フラン位だつたと思ふ。佛人の女のモデルを終日使ふやうな時には十フランの日當の外にどうしても晝飯を食はしてやるやうな事になる。一體女のモデル特に佛人は長く單調な替古をするのに耐へるものは少ない、普通の賃銀を拂つて眞面目に長く替古をして居ると、來なくなることがある。何しろ愉快に日を暮らすと云ふことが彼等の常なのであるから、彼等の機嫌を取つて、或時は踊り場に伴れて往くとか、物を買つてやるとかしなけ

ればならん。私などは踊や何かへ引つ張り廻はすのはつまらぬと思つて、食物を喰はせ、酒を飲ませた、或時は費用を渡して牛肉や鳥などを買つて來させて、書室で調理させたこともある、こんなマ、ゴトみた様なことは彼等の好むところだ、或時は喰ひに伴れて行つたこともある。こんな御機嫌取をしないと長く續かぬ。それで五フランの賃銀以外に臨時に費用が要るから書生がモデルを備ふのは困難である。私は自分で飯を炊く位に儉約をしながらも、モデルを頼む爲めには空費な贅澤な眞似をしたこともある。

私の佛蘭西留學は、最早や十七八年前で、最後の佛蘭西行でさへ、もう十年前のことで、今は餘程變つて居るところと思ふ。何を云つても文明の中心で、暫くの間に風俗習慣も變ることが多い、譬へば私が巴里で法律學校へ通つて居た時分には、學生はシルクハットを頂いて居たが、次に往つた時にはそれが大層減つて居た。其後往つた人の話では、學生でシルクハットを被るものなどはなくなつたと云ふことである。そう云ふ有様だから、モデルの事も餘程變つた事と思ふ。最近の事は誰か新歸朝者が話すであらう。(文責在記者)

『美術新報』九十六 明治四三年四月一日